２０２５年度

入学試験問題 （１期）

国　　語

2025年２月３日（月）

解答を始める前に次の注意事項を充分に読みなさい。

受験上の注意事項

1．受験票と筆記用具以外は机上に置いてはいけません。
2．試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
3．不正行為と認められた場合には退席を命じることがあります。
4．「開始」の合図で、問題冊子・解答用紙を点検し、解答用紙の受験番号・氏名欄に受験番号・氏名をはっきり書いてください。
5．問題に関する質問は不明瞭な文字等の確認以外は応じません。
6．問題冊子の余白部分や白紙のページは、自由に使用してかまいません。
7．試験終了時まで退席することはできません。試験終了の合図と同時に、監督者の指示にしたがって解答用紙を通路側に置いてください。
8．身体の具合が悪くなったときは、手を挙げて監督者に申し出てください。
9．携帯電話を持っている人は電源を切ってください。これを時計として使用することはできません。
10．問題冊子は持ち帰ってかまいません。

〔Ⅰ〕

次の文章Aと文章Bに関する設問に答えたのち、文章Aと文章Bを関連づけて考察する設問に答えなさい（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）。

文章A

意味と無意味のはざまで

日々のありふれたいとなみには、さまざまの意味が込められている。食べるという生き物としての最低限のいとなみ一つをとってもそうだ。なぜ「いただきます」と言ってから食べるのか。なぜ箸を使うのか。なぜ、食べられるのに絶対に食べてはいけないとされる食材があるのか。食べるのにも作法がある。そしてその作法は、それぞれが属する、文化という、意味の組織のなかに織り込まれている。だから、食事のマナーも、食のタブーも、文化によって、似ている点もあるが異なる点のほうがはなはだしい。

衣服もそうだが、何より言葉がそうである。赤ちゃんのときは「おんぎゃおんぎゃ」と声を出しながら笑ったり大泣きしたりするだけだが、いったん言葉を憶(おぼ)えると、やけどをしたときでも「ぎゃー」と叫ぶのではなく、「あつっ」「痛い」と金切り声を上げる。本能的な表現ですら、言葉というかたちで分節されてなされる。

そしてその言葉のなかで、さまざまの「人間的」な意味というものが複雑に生成してゆく。行動も、思考も、感情も、そして感覚までもが、この意味の組織のなかで編まれてゆく。労働も、文学や思想も、希望や失意も、「おいしい」「きれい」も、そしてこのわたしの「自分」というものも、である。「自分」もまた、ある精神科医が言っていたように、「ひとが自分で自分に語って聴かせるストーリー」にすぎない。言ってみれば、そのストーリーを何度も語りなおすのが人生みたいなもので、そのつど自分がもっとも納得できる物語を【　A　】ながら、それでもどこかフィットしないところがあると感じている。

人間はだから、みずからa**ハ**きだした糸を自分の巣とし、ライフ・ステージとしている蜘蛛(くも)のように、みずからb**ツム**ぎだした糸の網に引っかかってもがいている存在だと言えそうである。

ひととしての成熟とは、自分たちを編んできたこれらの意味の組織をわきまえ、無理なく修正してゆくことができるようになることだと、ふつう思われている。これまでほとんど顧みられることもなかったような些細(ささい)なことがらにも、深い意味が見いだせるようになることだと考えられている。言ってみれば老成である。

が、他方で①**ひとは、未熟にも憧れている。**自分の存在にも行動にも意味を問い求め、あがくことに疲れて、意味など考えずに母を求め、食べ物をほしがる赤ちゃんが、無性にうらやましくなる。そう、意味をより厚く、濃(こま)やかにすることよりも、いっそ

のこと意味の〈外〉に出てしまいたいと思う。意味とか理由とか秩序といった面倒なものを考えずに済めば……と思ってしまう。そして、ときに身体がわけもなく悦(よろこ)んでいる状態、無意味に気持ちのいい状態に浸りきっていたいと願うこともあれば、ときにとんでもない愚行、凶行に走ってしまったりもする。

なぜ、こんなに不安定なのか。

問いの性質

ひとは意味にこだわりつつ生きる。そのことで他の生き物にはない文化というものを生みだしてきた。けれども、意味の組織を編むというのは、じつは意味になりえた別の何かを隠すというかたちでしかなされない。意味というフィルターでスクリーニングするのだから、網に引っかからないものは存在しないことになるという意味でだけではない。意味を編むということは、編まれた意味の秩序にとってあっては困るような欲望を「無意識」へと抑え込んでおくということでもある。だから、夢がしばしばそうであるように、本人にとって重大な意味をもつ「あらぬ」欲望を隠すために、どうでもいいようなことを前面に出す。ひとにとってほんとうにのっぴきならない欲望は、ときとして自分がしたいと思っていることがらの脇か背後にあるものなのである。〈わたし〉をほんとうに編んでいるものをわたしたちはまだ知らない。

幼子(おさなご)から青いひとまで、共通しているのは、ことがらには一つしか真理がないこと、そしてその真理はいまあきらかに「われ」の側にあるという確信だろう。

納得はゆかないが受け容れざるをえない、理不尽でもそうするよりほかない……。そんな思いを渋々ため込んでゆくうち、ひとは、「理解」にもいろいろなかたちがあることに気づくようになる。言葉で言えば、分かる、解る、判る、思い知る、承服する、納得するといったかたち。

これらをいま一つずつ正確に定義しなおすことはできないが、「理解」のこうした多様な位相を、〈問い〉と〈答え〉の多様な対応関係として描きなおすことはできる。

「正解」はふつう、一個しかないと考えられている。だから、答えが出ないといらいらする。けれども、問いには、複数の解がある場合がある。こう考えても解けるし、ああ考えても解ける、そんな問いである。たとえば「光は粒子でもあるし波動でもある両義的な存在だ」という説。しかし、対立する二つの解がともに主張しきれないという例もある。

「世界に果てがあるか」という問いは、あると考えても、ないと考えても首尾一貫した説明がつかない。物理学にはこの種の

問題が多い。「世界は何のために存在するのか？」「世界に始めと終わりはあるのか？」などという哲学的な問いともなれば、そもそも人間には根拠のある答えは出せない。

もっと身近な問題ならそれほどややこしくないかというと、むしろ逆である。生きてゆくうえでほんとうに大事なことには、たいてい答えがない。たとえば〈わたし〉とはだれかということ、ひとを**翻弄**する愛と憎しみの理由、そして生きることの意味。これらの問いは、答えではなくて、問うことそれじたいのうちに問いの意味のほとんどがある。これらの問いとは一生、あまでもないこうでもないと格闘するしかない。問いつづけることが答えることだと言ってもいいくらいだ。

しかも、これらの**②問いへのかかわり方は、時とともに変わりもする。**若い頃に、もし答えが出なければ生きてゆけないとまで思いつめていた問題が、歳を重ねるとともに褪せて見えてくることがある。理解は時間とともに進行してゆくものだから、あのときはわからなかったけれどいまだったらわかるということも生じる。あるいは逆に、何かが見えてしまうと、それが他に波及していって、いままで自明だと思っていたことのすべてが問いの対象へと裏返ってしまうこともある。ありとあらゆるものを一から問いなおさなければならなくなり、そうして世界を見る眼それじたいが変わってゆく。そのあいだにはもちろん激しい抗いもある。だから、理解はジグザグに進んでゆくほかない。そしてそのうち、すぱっと割り切れる論理ではなく、噛んでも噛んでも噛み切れない論理のほうが真実に近いといった感覚が、知らぬまに身になじみだす……。

答えのない問い、答えがすぐに出てこない問い

けれどももっと大事なのは、わからないけれども、わかっていないということだけはわかっているということではないだろうか。あるいは、わかったつもりになっているが、まだわかっていないことがあるとわかるということ。**③問題にいっそう近づくとはそういうことだ。**もっと言えば、生きるうえでほんとうに大事なことは、わからないものに囲まれたときに、答えがないままそれにどう正確に処するかの智恵というものだろう。他国との政治上の駆け引き、地域社会でのもめごと、介護をめぐる家族のなかの諍い、子育てをめぐる迷いやためらいといったものが、そういう正解のない問題の典型例だ。

若いあいだは、わからないものをなんとしてもわかろうとする。わからないまま**dホウチ**していることに耐えられない。だから、わかりやすい物語にすぐに飛びつく。医師がそうじゃないと言っても、「わたし、アダルトチルドレンなんです」と頑なに主張する。若いひとたちは（などとえらそうなことは言えないのだが）、思いどおりにならないもの、思いどおりにならない理由がわからないものに取り囲まれて、苛立ち**eアセ**り、不満や違和感で息が詰まりそうになっている。【　B　】その鬱ぎを突

破するために、自分が置かれている状況をわかりやすい論理にくるんでしまおうとする。その論理に立てこもろうとする。

（鷲田清一（わしだ）著　『わかりやすいはわかりにくい？―臨床哲学講座』　ちくま新書より）

〔設問〕　次の設問に答えなさい。

問1　波線部**a**～**e**で、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問2　**①ひとは、未熟にも憧れている。**とあるが、その原因は何か。その説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　未熟さの中に、問いを発見するカギがあることに気が付いたこと。
イ　未熟な言葉の中に原初的な意味や秩序の芽生えを発見できること。
ウ　未熟さを内包していることが文化の創造の源となること。
エ　意味を問い求めて疲れ、意味の外に出てしまいたいと思うこと。

問3　**【　A　】**に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　削除し　　**イ**　着込み　　**ウ**　否定し　　**エ**　脱ぎ

問4　**【　B　】**に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　加えて、　　**イ**　しかし、　　**ウ**　だから、　　**エ**　もちろん、

問5　**②問いへのかかわり方は、時とともに変わりもする。**とある。それはなぜか。その理由を本文中の言葉を使い、八十文字以内で答えなさい。

問6　**③問題にいっそう近づくとはそういうことだ。**とあるが、そういうこととはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　わからないけれども、わかっていないということだけはわかっているということ。

イ　わかったつもりになって、わかっていないことに気が付かないこと。

ウ　わからないものに囲まれたときに、答えがないままそれにどう正確に処するかの智恵が生まれること。

エ　生きてゆくうえでほんとうに大事なことには、はっきりした答えがあるということ。

文章B

知的創造は、問いの発見から始まる

知的創造が他者に対する説得術である以上、そこには一定の形式があります。少なくとも学問は、自由気ままに自分の思いを言葉にすればいいのではなく、一定の形式、すなわちフォーマットに従って考えを掘り下げ、他者が納得できる仕方で検証していく作業です。そして、そこで決定的に重要なことの一つは、問いのこだわりから出発すること、もう一つは、その問いへのありきたりな回答を超えようとする、理論的な枠組を構築することです。つまり、問いへのこだわりと理論的な枠組の構築が知的創造の大きな柱となります。

かつては、〈問い〉という代わりに〈問題意識〉という言葉を使っていました。大学でゼミや研究会に参加すると、「君の問題意識は何なの？」とまず尋ねられる時代があったのです。研究は〈問い〉への応答ですから、〈問い〉がなければ成立しません。問い、つまり【　C　】は、知的創造が生まれてくる原点であり、これは決定的に重要なものです。

〈問い〉が言語化されて明確になったものを、一般に〈研究課題〉と言います。この研究課題に答えるために必要な分析的な枠組の構築ができれば、知的創造はもう半分以上、終わったようなものです。なんだ、簡単じゃないかと思わないでください。昨今では大学院生でも、そもそも問いらしい問いを持っている人が減っています。みなさん、問いとは何かを考えもせずに、私の研究は「～～を明らかにすることです」とか、「～～について興味があるので調べます」とか言います。そんなものは問いでも何でもなくて、単なる興味関心です。④**興味関心は、問いではありません。**この違いを知るところから、研究が始まります。

ここでまず注意しておきたいのは、ここで言う「問い」と、若い研究者がしばしば口にする「リサーチクエスチョン」は別物だということです。昨今の学生には、研究の出発点となる大きな〈問い〉や〈研究課題〉を曖昧にしたまま、何となく思いつい

た「リサーチクエスチョン」を三つ、四つ挙げて、そこから研究を始める人が少なくありません。その場合、そこで掲げた「リサーチクエスチョン」の探究に行き詰まると、また別の「リサーチクエスチョン」が**掲**げられていきます。このやり方では、何度同じことを繰り返しても、一歩も前に進むことはできません。「リサーチクエスチョン」を何か掲げるとしても、それ以前にここで言う〈問い〉や〈研究課題〉が必ず必要なのです。それさえあれば、あるリサーチクエスチョンで行き詰まったとしても、その手前の研究課題に立ち戻ることができるので、研究の土台が**ユ**らぐことはありません。土台の根本に、〈問い〉は位置づけられるのです。

もちろん、問いが生まれてくる回路は一つではありません。実社会での経験から問いを見つける人もいれば、報道で知った社会問題に関心を**イダ**き、そこに深入りしていく人もいるでしょう。これらの場合、社会の中に問いがあるわけです。しかし別の人は、古典を読むなかで、自分が格闘すべき問いを発見するかもしれません。ここでは⑤**前者を問題起点の問い、後者を理論起点の問い**と呼びたいと思います。それ以外にも、対象自体への深いこだわりが問いに発展していくことがあります。これを、対象起点の問いと呼ぶことにします。

私は、この三つのパターンが、問いが成り立つ主たる回路だと思っています。そして多くの人の場合、このいずれか一つに限定されることはなく、その人の問いの形成には複数の要素が混ざり合っています。しかし、ここで重要なのは、長い時間をかけて探求するに値する問いを、実体験や読書、そして友人との議論などから見つけることです。

【　D　】、もう一つの柱である分析的な枠組を構築するには、先行研究の批判的な**渉猟**が欠かせません。つまり、勉強をしなければ駄目だということです。しかし、単に勉強をすればいいか、関連しそうな本や論文をたくさん読めばいいかというと、そうでもありません。読めば読むほど、その本の議論に引きずられて、もともとの自分の方向性からずれていくのがよくあるパターンです。よく、勉強好きな学生で、数カ月ごとに研究の基本的フレイムが変化し、それに応じて研究テーマもガラッと変わってしまう学生がいますが、三回以上のテーマ変更がうまくいったケースをあまり知りません。問いが理論的な枠組にまで練り上がっていくには**ジュクド**が必要で、一方では自分の問題意識にこだわり、他方では先達の諸研究と対話しながら、自分が建てるべき支柱を発見していかなければならないのです。

このように、知的創造はゼロからまったく新しいものを生み出す行為でもなければ、当てずっぽうにやっていたら、何か素晴らしいものに出会うといった過程でもありません。知的創造には、一定の方法的な組み立てがあります。研究とは、自分の発想や知識を、何の形式もなく自由に表現することではないのです。それは「思った通りに書きましょう」ということではなくて、

ある組み立てに従って問いにこだわり、考えを深めていくことです。

ウンベルト・エーコの『論文作法』（而立書房、一九九一年）には、この研究の組み立てについてのエーコの考えが明快に示されています。彼は、こんなことを言っています。「論文を作成することは、独特のアイデアを整頓し、資料をきちんと整理する技術に習熟することを意味する。それは一種の【　E　】作業」なのだ。だから、「論文のテーマは、これに要する作業経験ほどに重要ではない」と。もちろん、論文のテーマも重要ですが、さらに重要なのは、問いに基づいて理論と分析、結論までをまとめ上げていく組み立ての方法です。

この組み立て、知的創造のプロセスには、八つの要素があると私は考えています。最初にあるのは、先ほど述べたように、〈問い〉の発見です。その〈問い〉に基づいて、相手にすべき〈研究対象〉が選ばれます。そこから〈先行研究〉の批判的検討へと進み、〈分析枠組〉の構築に向かうのです。これら四つの要素が、前半の一つのサイクルを形作っています。サイクルというのは循環的ということですから、当然、〈先行研究〉の検討を通じて、〈問い〉を再考することもあり得ますし、時には〈対象〉を選び直すこともあり得ます。とにかく、いい論文を書こうと思ったら、〈問い〉〈研究対象〉〈先行研究〉〈分析枠組〉の四つの要素の間をぐるぐる回りながら基礎を固めていくべきです。知的創造がある種の建物だとすると、これは文字通りその建物の基礎の杭を打ち込んでいく作業で、時間がかかります。しかし、ここがしっかり出来ているかが、その上の建物の強度や高さを決めてしまうのです。

（吉見俊哉著　『知的創造の条件　ＡＩ的思考を超えるヒント』　筑摩書房より）

〔設問〕　次の設問に答えなさい。

問７　波線部 f ～ j で、「カタカナ」は漢字に、漢字は読みを「ひらがな」で答えなさい。

問8　**④興味関心は、問いではありません。**とあるが、問いとはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　研究で明らかにする目的を持った問い。
イ　知的創造が生まれてくる原点としての問い。
ウ　リサーチクエスチョンとしての問い。
エ　興味がある対象への問い。

問9　【　**C**　】に入る適語を文章中から漢字4文字で抜き出しなさい。

問10　【　**D**　】に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　他方　　**イ**　つまり　　**ウ**　なんとなれば　　**エ**　面白いことに

問11　【　**E**　】に入る適語を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　演繹（えんえき）法的　　**イ**　背理法的　　**ウ**　弁証法的　　**エ**　方法論的

問12　**⑤前者を問題起点の問い、後者を理論起点の問い**とあるが、その説明として最も適切なものを次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　前者は先行研究から生まれた問い。後者は研究対象から生まれた問い。
イ　前者は自分の発想や知識を基にした問い。後者は何の形式もなく自由に表現する問い。
ウ　前者は実社会の経験や報道で知った問い。後者は古典を読むことから生まれた格闘すべき問い。
エ　前者はリサーチクエスチョンとしての問い。後者は分析的な枠組を構築する問い。

問13　文章A と 文章B における共通した論旨を書きなさい。また、その論旨について、自分の考えを書きなさい。二段落構成とすること。一段落目に共通の論旨を書き、二段落目に自分の考えを書きなさい（この設問に関してのみ、段落始めの一文字空けを必須とする）。両方合わせて百二十字以内で書きなさい。

〔Ⅱ〕

以下の文章を読んで、後の設問に答えなさい（作問の都合上、一部表記を改めた所がある）。

他人の家族との比較が諸悪の根源

家族の話のどこが問題かといえば、自分の家族にしか目が向かないことである。それ以外のことに興味がない、家族エゴ、自分達さえよければいい。

事件が起きるとまっ先に、自分と関係があるかどうかを気にかける。どんな事故でもまず、自分の家族にふりかかってこなければ安心だ。【　A　】よそごとなのだ。

日本という国にもみてとれる。

飛行機事故が起きる。船の事故が起きる。

「犠牲者に日本人は含まれていません」

日本人がいた場合には、ニュースの扱いが大きくなる。テレビでも新聞でも。日本人がいなかった場合には、日が経つにつれて【　B　】扱いが小さくなる。最後には、あの事故はどうなったのというくらい、見当たらなくなる。

日本人や知っている人が犠牲者に含まれない場合は、マスコミのみならず、みなどこかでほっとする。「あっしには関わりのねえことで……」と**木枯し紋次郎**(注1)張りのセリフで忘れてしまう。

日本人エゴに陥って、他の国のことに我関せずという島国根性が顔を出す。欧米の場合は陸続きで、他人事（ひとごと）とは思えないから、常に目くばりをして、もし自分の身に起きたらと想像をたくましくする。そのあたりが、日本人は［　①　］だ。自国と同様に、他国のことも考えなければ、今のような国際的に開かれた時代にはうまくいかない。

自国民が含まれるかどうかをまっ先に伝えるのと同様に、気になるのは、犠牲者の数が少なければ扱いは小さく、犠牲者の数が多ければ、大きな扱いになる点である。

数が少なかろうと多かろうと人の命の重さに変わりはないはずだが……。

日本人かどうかにこだわり、同じ故郷の人かどうかで関心の持ち方が違う。自分の家族であるかどうかで悲しみや衝撃は大きく違ってくる。宗教にあまり重きを置かない人の多い日本人の場合、他人を自分の家族と同じように愛するといっても、なかなかそうはいかない。

それぞれが家族という殻の中に閉じ籠もって、小さな幸せを守ろうとする病にかかっているようだ。

「他人の不幸は蜜の味」というけれど、他人の家族と自分の家族を比べて幸福度を測る。他人との比較は、諸悪の根源なのだ。

自分なりの価値基準がないから、キョロキョロあたりを見まわし、友人・知人と比較する。

【　C　】三種の神器といわれたものが各家庭にあった。一つ目が子供が小さい頃に買って今や誰も使っていないピアノ。調律などされていないから音が狂っている。二つ目が全巻そろった百科事典。新しいまま一度もあけたことがない。家具ではないのだから使わないなら邪魔だ。三つ目が家族の誰かが取ってきたゴルフのカップ。

この三つはどれも場所をとる。使わないならとっぱらったらいいのに置いてある。よその家も置いてあるからというのが理由だった。最近は少し変わってきたが、雑誌などでインテリアが紹介されて評判になると、同じものが売れるという。

自分の家の［②］を考える前に、他人の家をまねすることから始まる。

家族エゴで固まっているのに、暮らしに自信が持てない。他人の家族を気にしながら、自分の家が上だと思えると誇りにし、他人の家がいいと、不平やら不満やらが噴出する。

③一つひとつの家族は違うからこそ面白い。お互いに違いを認めることから、相手の家族を尊重する気持ちも出てくる。

自分達だけよければ他人はどうでもいいという家族エゴ、自分の住んでいる所さえよければという地域エゴ、自分の国さえよければという国家のエゴ、全て争いのもとになる。

家族エゴはどうして起きるのか、家族が個人である前に役割を演じているからではなかろうか。

夫のことを「主人」と呼ぶ、おかしな文化

父、母、子供、それぞれが親としての役割、子としての役割で、家族が守られている。役割を守っている限り、安泰なのだ。

かつてはとと座、かか座などといって、いろりのまわりの座る場所も決まっていた。食卓でも父、母、子供の座る場所は決められていた。役割が［④］して家族の概念は出来上がり、そこから外れることは健全な家族と思われない。戦後は日本でも家より、個が優先するようになり、家族間の関係は少しずつ変わってきた。

夫婦と子供という形でなくとも、夫婦だけ、父と子、母と子というふうな家庭が増えてきた。父、母、子供がそろっていることが家族の理想型ではない。どんな組み換えも可能である。人間性を大事にして役割や型に自分をはめようとせず、自由な家族構成が大事だ。

私の今の家族は一人だけだが、**⑤私は外に向かって必ずつれあいという言葉を使う。**

つれあいとはなかなかいい日本語でどちらが主でも従でもない。つれ合って暮らしているという実態をよくあらわしていて、気に入っている。

俳句の友達に**中山千夏**(注2)さんがいるが、彼女は結婚していた頃、相手のことをつれあいと呼んでいた。それを聞いて、ふさわしい言葉だと気づいた。以来、文字にするにも話をするにも、必ずつれあいと言っている。

時々直されることがある。ある女性雑誌でインタビューされた。私はつれあいと言っているのに、主人という言葉に変えられていたのだ。私は意識してつれあいと言っている。生き方、暮らし方の実態に一番ふさわしいのがつれあいという言葉だからだ。わざわざそれを「主人」と変えた編集者は、私が間違ったと思ったのだろうか。

彼女の中では「主人」が正しいのだ。【　D　】字のごとく家族の中の主たる人ということになる。そういう価値観の人もいるし、一般的にはまかり通っている。

【　E　】家族の数だけ、呼び方も考え方も違う。自分の価値観を押しつけてはならない。

私は**ゲラ**(注3)の段階で「主人」を「つれあい」と直したが、その編集者は**腑**(ふ)**に落ちぬ表情だった。**

パートナーという呼び方も多くなってきた。パートナー、日本語に訳せば、つれあいである。パートナーは結婚した相手でなくともいい。暮らしを共にしている人、特別の間柄の人、異性とは限らない。同性同士でもいい。お互い一番信頼出来る人ならばいい。すでに同性婚が認められている国もあるし、ごく最近、東京の渋谷区では同性のパートナーを認める方向にある。

籍などという枠にとらわれず、「パートナー」という言い方は自由でいい。

(注1)「木枯し紋次郎(こがらしもんじろう)**」**笹沢左保作の股旅物時代小説シリーズの主人公。小説は１９７１年から発表され、１９７２年からフジテレビ系列で放映された。中村敦夫主演のテレビドラマ、視聴率が30％を超える人気となった。

(注2)「中山千夏(なかやまちなつ)**」**１９４８年生まれ。日本の作家。元歌手、元女優、元司会者、元テレビタレント、元声優、元参議院議員。50年におよぶ芸歴と多彩な活動歴を持つ。

(注3)「ゲラ」「ゲラ刷り」のこと。「校正（誤字脱字のチェックなど）」を行うための「校正刷り」のことを指す。

（下重暁子著　『家族という病』　幻冬舎より）

〔設問〕　次の設問に答えなさい。

問1　空欄【　A　】～【　E　】に入る最も適切な語を次のア～オの中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。なお、それぞれに異なる語が入る。

ア　けれど　　イ　かつて　　ウ　それ以外は　　エ　ということは　　オ　徐々に

問2　空欄①に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　敏感　　イ　不評　　ウ　鈍感　　エ　受容的

問3　空欄②に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　独自性　　イ　優位性　　ウ　経済性　　エ　改革性

問4　傍線部③**一つひとつの家族は違うからこそ面白い。**とあるが、違いを認めることによるプラス面はどのようなものか。適切なものを次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　家族の違いを発見することで、対処方法を理解することができること。
イ　争いのもとになるエゴの世界から離れることができること。
ウ　違いを認めることでそれぞれの優位性に気が付くことができること。
エ　違うということは比べることであり、比べることで違いについての理解が深まること。

問5　空欄④に入る適語を次のア～エの中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　純粋化　　イ　明確化　　ウ　流動化　　エ　固定化

問6　⑤**私は外に向かって必ずつれあいという言葉を使う。**とあるが、筆者がその言葉を用いる意図は何か。**適切でないもの**を次の**ア**～**エ**の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア　人間性を大事にして、役割や型に自分をはめようとしない言葉だから。

イ　家族の中の主たる人が夫という価値観を認めていないから。

ウ　家父長性こそが日本社会の模範としての家族制度だから。

エ　生き方、暮らし方の実態に一番ふさわしいのがつれあいという言葉だから。

問7　⑥**腑（ふ）に落ちぬ表情だった。**とあるが、編集者はなぜ腑（ふ）に落ちなかったのか。その理由を本文中の言葉を用いて九十文字以内で答えなさい。

2025年度
入学試験

〔Ⅰ〕

国語（1期）解答用紙

志望学部・学科	受験番号
第1	
第2	
第3	
第4	

※太枠内を記入

氏名

合計点

問1

d	a
e	b
	c

問2

問3

問4

問5

問6

問7

i	f
j	g
	h

問8

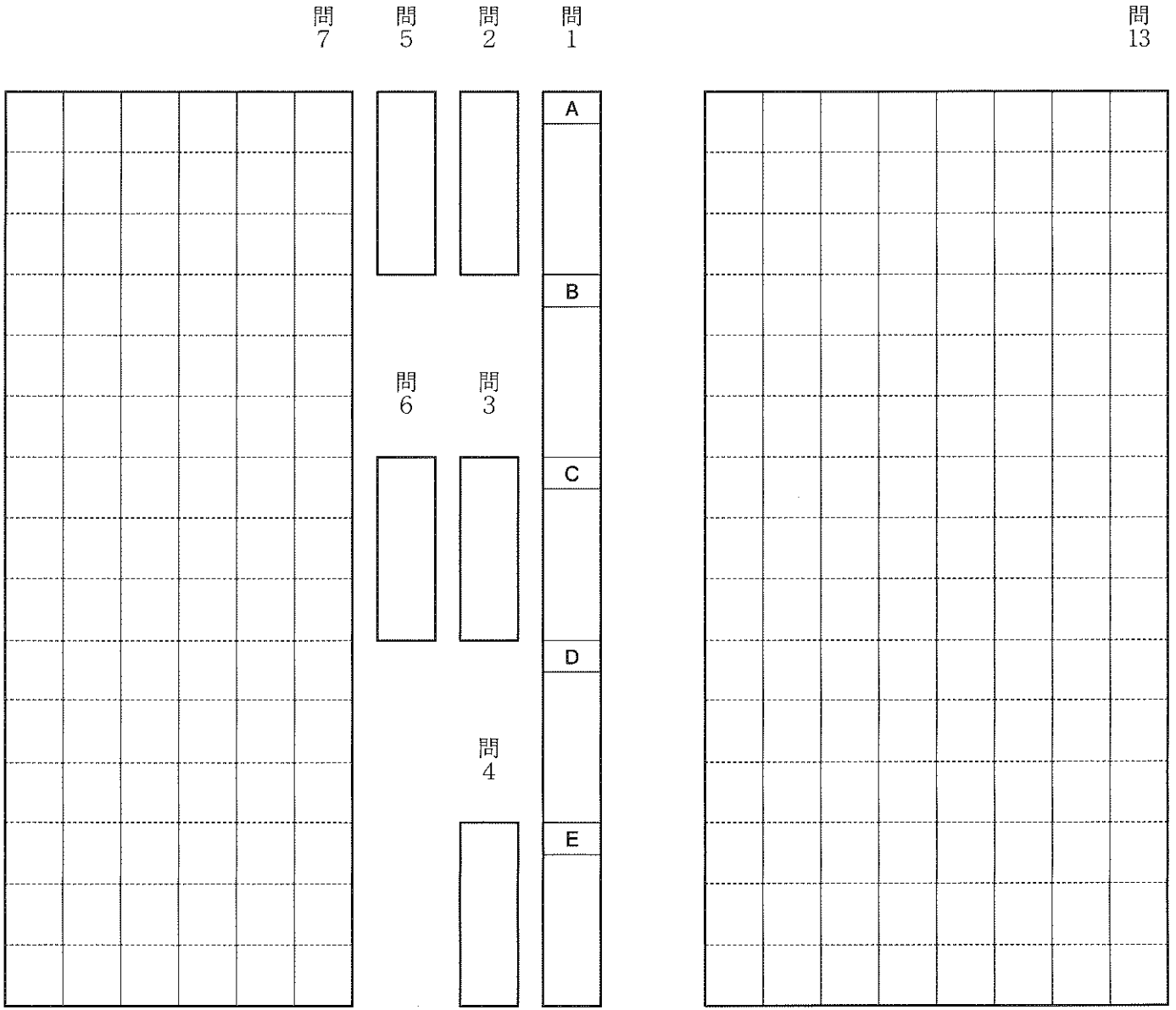
問9

問10

問11

問12

〔Ⅱ〕



2025年度
入学試験

国語（1期）解答用紙

志望学部・学科	受験番号
第1	
第2	
第3	
第4	

※太枠内を記入

氏名

合計点

〔Ⅰ〕

問1 a d

問2

問3 b e

問4 c

問5

問6

問7 f i g j h

問8

問9

問10

問11

問12

〔Ⅱ〕

問1 A B C D E

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問13

2025年度　入学試験

国語（Ⅰ期）

解答

〔Ⅰ〕　合計62点

問一　a 吐　b 紡　c ほんろう　d 放置　e 焦　5×2＝10点

問二　エ　問三　イ　問四　ウ　3×3＝9点

問五　「理解は時間とともに進行してゆくもの」であるから。また、わからなかったものがわかることがあったり、あるいは逆が生じることがあるから。　5点　一文目と二文目が書けて5点片方だけは3点。

問六　ア　3点

問七　f かか　g 揺　h 抱　i しょうりょう　j 熟度　5×2＝10点

問八　イ　問九　問題意識　問十　ア　問十一　エ　問十二　ウ　5×3＝15点

問十三　共通した論旨は「問うとはこだわること」である。この内容が書けていれば5点　共通した論旨についての意見が書けていれば5点　合計十点　10点

〔Ⅱ〕　合計38点

問一　A ウ　B オ　C イ　D エ　E ア　5×3＝15点

問二　ウ　問三　ア　問四　イ　問五　エ　問六　ウ　5×3＝15点

問七　編集者は主人という言葉の使い方が正しいと考えているのに、筆者は主人のことを「つれあい」と表現している。正しい言葉の使い方をしない筆者について納得していないから。　8点